

放射線環境学 レポート

農学部に進学してから、農業が根差す土壌についての講義を受ける機会を多く得たが、まだ片足を踏み入れたばかりという程度のもので、被災地の農業再生に対して具体的方策を考えつけないほどの知識は正直に言ってない。しかし、現地の現状を知るといのは、どの程度の知識量を持っていたとしても大切であり、実際に再生を行っていくのであればやはり、現地の人々の声を聴きながら、現場に即したことをしていかなければならない。今行われている再生作業のお手伝いをしながら、ここがもっとこうなればいいのに、という理想を持つこと、現地の人々がどこをどうしたいと思っているのかの願いを知ることが今学生である私のすべきことの一つであると思う。夢見ることにはきっといくつになっても大事であるが、年を重ね、可能なこと、不可能なことを知るについてそれは難しい。だからこそ学生である今のうちは理想を持って、その実現のために学ぶというモチベーションが重要だと思う。

行政がマニュアルに基づいて除染作業を行う中で、イノシシにより荒らされていたり、雑草がはびこる土地はどうするのかといった不都合が出てくるのは致し方ないことだと思う。未曾有の災害で、放射線物質が土壌中でどのような動きをするのか、実際のデータを取るには時間を要するが、復興対策となればそんなに待ってられないし、短い期間で、一律して行える方策を生み出さなければならない。また行政は常に様々な問題を抱えており、震災という非常に大きな問題に対しても大きく時間を割けないということは理解できる。しかしこの冷静な感情は被害を受けた当事者でないがゆえのものであるし、現地の人々はもちろん、自分たちの課題に全力で取り組んでくれる人を求めるし、自分たちでできることは何でもしたいと思う。そういうときに行政と専門家と地元の人々と、各拠点をつなぐ人の存在というのが非常に重要であると感じた。それぞれにおいて自由に動ける人というのは限られており、そこにおける立場とういのもあって、皆が再生を上手く進めたいと思っているのに、手を取り合うというのはなかなか難しい。しかし先生が再生活動に携わる中で、研究者同士のつながりの大切さを実感されたように、人同士のつながりは大変強力な武器である。どの立場から被災地の再生を思うにしても、再生に携わる人同士上手く関係を取り合っていくことが大事だと思う。大学生は、大学とのつながりはあるものの、まだまだ自由に動ける立ち位置にいるので、どの団体にも縛られない立場から見た再生というものを、現地に赴くことで築き上げていきたい。

この講義で各先生からのお話を聞く中で、今まだボランティアとして携わるのが限界の震災復興を、これから化学的知識を得ていくことで学術的立場から再生案を提供できる立場になるのだと思った。この変化は非常に大きなもので、力になれ具合が全然違う。しかしどんあときも現場を大切に、研究室から方策を発信するだけでなくこの身をもって実践していきたいと思った。